
悲し愛し

たまゆら

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲し愛し

【Nコード】

N9353H

【作者名】

たまゆら

【あらすじ】

偶然か必然かは知らないけどね。出会ってしまったんだからさ。結局流れるしかないんじゃないの？人間なんだし

プロローグ

―かたや、寮の一室で…

…ああ、朝が来てしまった

今日からまた辛い日常が始まる

…まあ慣れっただけど

気怠い体をベッドから起こし、カラカラの喉に水分を通す

渴きは、少しも潤うことはないけど

「…はあ…」

荒く息を吐きながら、呟いた

「…仕方ないんだけど…」

広い部屋に、その呟きは妙に響いた

―かたや、職員室…

「これが…で…で…」

退屈な話を聞きながら、…というか聞き流しながら、窓の外を見る
…ここで…新しい生活が始まるのか

期待と不安の新生活―には程遠いが…まあ

「えーと…ああ、最後にね、この学校の校風というか…伝統のよう
な規則があるんだけど、知ってるかな？」

「…規則？…ああ」

ようやく話の終わりに、耳についた言葉が一つ

知らず、不敵な笑みがこぼれる

「…ええ、知ってますよ」

こうして始まった、ある学校の新学期の一日
出会うべくして出会うのか、はたまた偶然か
どちらにしても数奇な出会いは、目の前に迫っている…

電車はすぐに出る

第一話 境遇

―八月末

夏休みという名の長期休暇が終わり、新学期が始まる

とは言っても、その心機一転の機会をこんな知らない場所で迎えるとは思わなんだ

しかも

「楽しかった」、とあるべき夏休みが散々だった訳で

夏休みに入っすぐ、親父が逝った

別に病弱だった訳じゃない。それまでピンピンしてて仕事に奔走してたし

単なる事故。人なんて簡単に死ぬものだともまざと見せられた訳だ
挙句夏休みを葬式だり、引き取り先がどうだりで引っ張りだこで遊
びなんて到底叶うもんじゃなかった

―ああ、勘違いしないでくれ

こんな人事みたいに言えるのは、ホントに他人みたいな奴だったからなんだ

仕事仕事って、俺の都合なんて一度だって通った事がない

まあそれで俺も生きてこれた訳だからしゃーねー。死んでも悲しまない、ってことでチャラだ

あと、母親は俺を産んですぐ逝った

こっちは元々体が弱かったらしくてね

まあ顔も覚えてない。なんだかね。不憫だ

そんで引き取ってくれたのが祖父

俺がかなり幼かった頃から、親父はあんなだったからね。育児なんてしないもんだからよく世話になった

…色々あって恨みも結構あるが…割愛

そのジジイが創った学校があるらしく、近くにジジイの家の一つがあることもあり、こっちに越してくるようになった

家は今は使ってないらしく、俺にくれるらしい

この歳で家持ちとは…すごいねえ

あん？親父とやってることが変わんないって？

親父の親父だし。しかももう大分デカくもなったから干渉されなくていいもんだ。家事だってできる

とまあここまでは順風満帆、万事OKなんだが…

状況なんて一変するのが人生だ。特に俺なんかは

一見すりゃ俺は不幸な奴だしな。思った事ねーけど

それでもこの変化にはついていけない時もある

…そんなもんだろ、デカくはなったがまだガキなんだし

どうなることやら、これから…

第二話 嫌い

―ああ、憂鬱な朝。憂鬱な世界。憂鬱な、自分
なんでこんなに嫌なんだろう、ここは、これは
私はそう。全部が嫌い

みつともない自分が、それを創った世界が
目覚めの瞬間、いつもそんなことが頭をよぎる

「…ああ、もう…」

起き上がって、頭をかきむしる

この世界は狂ってる。こんなにも憎んでいるのに表情一つ変えず、
私に『朝』を運んでくる

長い髪は寝癖でボサボサ、気分の悪さから顔も最悪だろう
ベッドから降りて、ユニットバスの中へ

寝間着のまま入って、浴槽に頭を突っ込んでシャワーを握る
蛇口を捻って、頭にそれをかざす…が

「…あれ？」

水が出ないから蛇口をもう少し捻りながらシャワーを見ると―
バシャー！

予想通り、冷たい水が顔を濡らし、手から離れたシャワーは暴れて
全身を濡らし…蛇口を締める頃には一面水だらけ

溜め息をついて立ち上がり、鏡を見る。周りよりかなり幼く見える
容姿、それもすごく嫌

「…もうやだ」

呟きは妙に響いた

―こんな私ですが、この学園で生徒会長やってる
この学園って言うてもわかんないか。私は寮住まいで学校に通って
るの。だからここっていうのは学園の敷地内だから言える訳
ちょっと都会からは離れてるけど、広くて綺麗でいい所…多分

私は何かを好きになった事がない。というか全部嫌。もう耳にタコ？
それぐらい嫌い。何もかもが

そんな奴が生徒会長やるなって話だけど、仕方ないの。この学園普通じゃないから

どう普通じゃないかはすぐわかるわ。立場的な関係で学園長から知ったけど、転校生が来るって言う事だし

転校生が来るから、っていうのも普通からは考えられないけどね。割愛させて

それもこれも、面倒だわホント

夏休みが終わった。私にはコレが本当にキツイ

別に宿題が終わってないとかそんな低次元の話じゃないわ。そんなの夏休み初日に終わったし、学校にも生徒会の仕事で毎日のように行ってたし

まあこの理由も割愛。言つてて嫌になるし

しかも現実には『今』に止まろうとしている私を引きずって先へ先へと連れて行く

私はこれから生徒会長として、仕事がある。夏休み明け初日から

まずはこの床を拭いて…ああ面倒

役割なんて放棄しちゃえばいいのに…私って律義というか、馬鹿ね結局流れるしかないのかしらね。私も

生徒会長として頑張る自分？もちろん嫌いよ

大ッキライ

第三話　くその男く

新学期の浮つきを隠せずに、バスケットボールのコート四つ分という大きめの体育館に入っていく学生達

大量のパイプ椅子が並べられる中、一足先に最前列一番端に座っている男が一人

転校生の彼である

長い髪は不作法に伸ばされ、前髪は確実に視界を妨げるであろう長さだ

その下には、見えにくいメガネがかけられている

その中の眼光は鋭く、常に気を張っているよう…なのだが、本人にはその気はない

まあ要は、目付きが悪い

それを隠すための前髪だったりするのだが…それが原因で視力が低下し、今眼鏡をかけざるを得ない状況になったのは秘密らしい容姿とは違い、少し抜けた奴である

さて、そんな事はいざ知らず。生徒達が席についていく

その視線は転入生の彼に注がれる

何しろ本学初の編入生。この学園は入学試験が困難であること有名で、さらに実技テストまである

ある程度の高い知能と、優れた身体能力の両立が必要なため、何人もの受験生が涙を呑んだ…筈なのに、転入生

相当な能力の持ち主に違いない、と期待の羨望を向けるのは当然かもしれない

しかし、本人としては編入試験は学園長との面接で終了したため、そんな視線の真意を知るよしもなく、ただ転入生として目立っているとは思っていない

(―ああ…なんだあこりゃあ…俺あ見せ物かい)

避けようもない視線から隠れるように、視線を下げるしかなかったのだった

彼の名は辻堂瑛

彼の運命の時は、着々と近付いている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9353h/>

悲し愛し

2010年10月10日04時30分発行